第９６回　まちづくり塾記録

「母親が語る、父親が語る不登校　～いろいろな生き方があるよ～」

青木洋子さん、長島正さん（浜松登校拒否親の会）
平成２２年3月２１日（日）
１３：３０～１５：３０

○青木洋子さんより

２人の子どもが不登校になったことをきっかけに「浜松登校拒否親の会」を立ち上げ2月で２０年になる。子どもたちも３０代となり学校とは関係なくなったが、月１回の定例会や講演会などを行っている。今回は、会員の長島さんから父親の視点で感じたことなども紹介する。

◆不登校・・・否定的にみない。自己肯定感。

最近、皇室の愛子様が不登校だと世間で取沙汰されているが、そっとしてあげられなかったのかと思ったり、そうせざるを得なかったのかなと思ったりしている。ご存知かと思うが1年で３０日以上休むと不登校といわれ、疲れていても我慢して行く子どもがほとんどである。

文科省は、全国で１３万人以上いる不登校の生徒を少しでも減らすため、別登校にしたり、医療機関やカウンセラーを紹介したり、きめ細かな対策を立てているが、昔のようにほっとかれることがない分ゆっくり休むこともできない。

一昨年の講演会で、弁護士の多田元（はじめ）さんが「不登校は権利」と言われていたが、その通りで順調にきた子どもでもいろいろなプレッシャーがあり、なかなか認めてもらえない世の中になっている。「学ぶ権利があって義務ではないんだよ。」と伝えたい。

◆不登校の子どもの権利宣言

私たちは年に1回、全国の子どもたちと親を交え、夏合宿を行っている。昨年8月に行ったときに、「不登校の権利宣言」を子どもたちだけで作った。その権利宣言はすばらしく、ＮＨＫのテレビ番組でも取り上げられた。その中で気になった第１３条「子どもの権利を知る権利」の内容を紹介する。「私たちは子どもの権利を知る権利がある。国や大人は子どもに対し、子どもの権利を知る機会を保障しなければならない。子どもの権利が守られているかどうかは子ども自身が決める。」と締めくくられている。子こどもたちは「ああしなさい。こうしなさい。」と上から目線で教えられることばかりで「そのままでいいんだよ。」という意識はなかなか教えてもらえない。その辺が生きづらさを感じている原因であるのかと思う。

◆進路について・親としてできること

普通に大学に通う若者でも「一人で食べている姿を人に知られたくない。」という理由でトイレのような個室でお昼を済ましている。周りに気を使うコミュニケーションの取り方は大変だと思う。学校へ行っている、行っていないに関わらずいろいろな進路があり、自分の好きなことを見つけ自分で決めやっていくことが自分らしい生きかただと思う。たとえ就職しても会社が倒産することもあり、そこは皆同じなので、先を心配するより今日一日を大切にしていくことが大事である。親としてはつらいと思うが、もっとつらい思いをしている子どもを受け止めて、いろいろな人と繋がりながらあせらず、あきらめずつきあっていくことが大事だと思う。

○長島正さんより

◆現在の状況

現在、掛川市に住んでいる。この4月から大学2年になる娘と高校2年になる息子がいる。娘は小学3年の3学期から不登校になり、中学も行かず6年と3ヶ月間不登校をした。中学3年の夏ごろ、卒業を前に「自分の居場所が無くなるのがつらい。」と言いだしたので高校へ行こうかという話になった。当然普通の高校へは行けないので、島田市にある経理が専門の島田実業高等専修学校に通うことになった。娘はここで日商の簿記2級を取得し、校長の推薦を受けて愛知大学の経済学部へ入学した。6年間の不登校中はほとん

ど家から出ず本を読んだり、絵を描いたりして過ごしていた。また、ホームシューレに加入し、インターネットで絵を投稿したりしていた。ホームシューレでも、全国の子どもたちを集めた合宿があり、娘は顔を見たことがない登校仲間と会えるこの合宿を楽しみに毎回参加していた。ホームシューレで親子共々救われたという感じはしている。

息子の場合は、中学2年の5月から2年間不登校をし、今は姉が行った学校へ通っている。同じ不登校でも姉とタイプが違い、中学1年の頃は「何の為に生きているのか、死にたい。」と言ったり、リストカットしたこともある。不登校中はゲーム三昧で昼夜逆転の生活をしていたが、どういうわけか「ドラムをやりたい。」とドラムの教室には1週間に1回通っていた。不登校の頃は、「学校へ行けない自分はダメな人間。学校へ行かない自分は将来生きていけないのでは。」という不安は親以上に持っていると感じていた。

◆父親として対処してきたこと

私自身、不登校に対する認識があり、休ませることにあまり抵抗は感じなかったが、いつか学校へ戻したいという気持ちは持っていた。学校へは、「どうすればいいですか？」ではなく「しばらく休ませたい。」と話したことが良かったのか、「親が責任を持つなら。」という感じで認めてくれ、定期的に学校へ状況を報告した。

息子の場合も同じような形だったが、息子はどういうわけか月に1度、放課後学校へ行っていたので学校側も様子を把握していた。また、不登校に関する講演会や集会に参加するうちに、このまま不登校でも道はあると思えるようになった。今振り返ればそういう親の気持ちが子どもの気持ちを少し楽にしたかなと思う。

◆子どもが不登校して見えてきたこと

最初の頃は、子ども、家庭に問題があると思っていが、視点を変えてみると、今の学校は人を育てるのではなく就職の下請け機関というか、就職をするために勉強をするところになってはいないかという疑問が沸いた。そう考えると、子どもが不登校をしていることは悪いこととは思わなくなってきた。誰が考えたか分からないレールに親も子どもも必死に走らされているような気がして、だったらそういう道を外れて生きていくのも悪いことではないのではと思えるようになった。

不登校した後で学校へ行く子は２５歳や３０歳で卒業を迎える子が多い。２２歳での卒業は人生５０年と言われていた頃決まったことで今は人生８０年。どうしてそんなに急ぐの？と言いたい。疲れたときは休み、疲れが取れたらまた行けはいい。お金は１８、１９の時に使わなければならない訳ではなくその時のために取っておけばいい。そんなことも分かってきた。

学校へ行っていようが不登校をしていようが親の心配はずっと続く。不登校をして心配が増えるのではなく心配の質が変わるだけで増えるわけではないと思えるようになった。当時は思えなかったが、今思えば決して不登校も悪くはない。

質　問Ａ：　不登校になる前に何か兆候はあったのか。うちの子は小学1年だが学校へ行けない。

青　木　：　人それぞれだが、私の場合は幼稚園の頃いやがることはあった。学校は最初の頃は楽しいと言っていたが小学4年で不登校になった。なぜ行けないのか聞いてみたのか？

質　問Ａ：　カウンセリングも受け、病院も5，6件連れていき、一緒に登校もしたがそれでも行けない。体の調子が悪くなってしまう。それこそ学校が休みの日とそうでない日では顔つきまで違う。

青　木　：　小さいときほど体に出たりする。行かなければいけないと思っていても行けない自分に対して体が反応し、実際に症状が出てしまうのだと思う。少し子どもを振り回しているような気もする。まだ小学校1年。ゆっくり気の済むまで休ませてあげたらどうか。

長　島　：　私の娘は兆候があった。学校へ行きたがらない娘を無理やり車に乗せて学校の前に放り出したこともある。チック症も出ていた。今考えても心が痛む。私は医者ではないが、どこか痛くなるのは極端な話、「このまま学校へ行かされると死んでしまう。」という防衛本能ではないかと思う。娘が通った学校は九九やアルファベットの大文字小文字も分からない子も通ってくる。最初は大変だがやる気があればどんどん吸収する。私の勝手な考えとしてはそういう状態ならしばらく休ませたほうがいいと思う。

質　問Ｂ：　中一になる娘が不登校。兄弟仲も悪く、1月頃兄が家を飛び出してしまい親戚に世話になっている。先生は熱心な方で家庭訪問やプリントなどを届けに来てくれる。今日の話を聞きしばらく休ませようかという気持ちになった。先生との連絡、関係はどうしていけばいいか。

青　木　：　娘さんは家庭訪問をいやがっていないか？

質　問Ｂ：　いやがっている。

青　木　：　私の場合は1ヶ月に1回こちらから状況を伝えた。先生が良かれと思ってやっていても善意の押し付けになってしまうことが多い。子どもの負担にならないようにしたほうがいい。どの家庭でも今

までうまくいっていたことがちょっとしたきっかけでくずれてしまうことはよくある。トラブルをチャンスとして捉え、あきらめないでいけたらいい。

質　問C：　祖母です。母親は2年前に離婚して家を出てしまい、5人の子どもの面倒を見ている。この4月に中学2年になる孫（娘）が2学期から急に学校へ行かなくなった。事あるたびに「中2になったら学校へ行くよね。」と言ってしまう。兄弟の仲はとても良いが私には反抗的。母親が出ていったのも追い出されたと思っている。父親は子どもの面倒をもともと見なかった人。誰も言うことを聞かない。

青　木　：　兄弟仲がいいのはいい事。おばあちゃんもあまり口うるさく言わないで少し距離をおいたほうがいいのでは。自分がやらなければという気持ちでよくやられているようだが、それが返って良くないのかもしれない。おばあちゃん一人で抱えてしまっているのでどこか言い合えるところがあればいい。もちろん親の会に来てくれてもいい。

質　問D：　不登校になり、次の段階へというときにいろいろな選択肢があると伺ったがどういう展開をしていけばいいか。

青　木　：　親が子どもに情報を提供するのはいいが、押し付け、負担にならないようにしないといけない。情報はいろいろ伝えたほうがいいが最終的に決めるのは本人である。

長　島　：　親は情報をいろいろ集めたほうがいい。学校のパンフレットなどを直接渡すのではなく、その辺に置いておくと親が知らないうちに案外見ていたりする。